



## 実と剛「次男の選択」(3)

### おみくじは「大凶」

櫛引を出る時、美大合格への手土産などはなかった。富樫実は京都市立美術大(現京都市立芸術大)を受験するため昭和28(1953)年3月1日、猛吹雪の故郷を出発し、京都に向かった。そして到着するとすでに春の気配だったのに驚き、あか抜けた古都の風情に気持ちさらさらと委縮した。「大学に受かったとしても、こんなみやびな都会で自分はやっているのだろうか?」という不安が押し寄せてきた。受験は無事終え、せめてもの運試しに名刹・清水寺に向きおみくじを

引いた。気持ちを奮奮させためでもあった。

そして出てきたのがなんと「大凶」。中身には「飛ぶ鳥 その羽根を落とす」



母校・櫛引西小(旧山添小)が平成6(1994)年新校舎建設の際、造られた「空にける階段」。重厚な形が流線形とは違った個性を示す

とまで書いてあった。苦しみながら受験資格を取って、ようやく試験にこぎ着けたのに、その結末が「大凶」……。あまりの巡り合わせの悪さに気持ちはムシヤクシヤするばかり。帰りの汽車に乗り込んだ際「このまま列車が転覆すればいいんだ」とまで思い詰めた。不合格で再度家業の農業に従事というのもバツが悪いだけだ。今後の人生に向け、絶望感ばかりが頭をもたげ

### 大逆転の合格通知

17日、合格通知を右手に振りながら、雪解けのぬかるんだあぜ道を家に戻ってきた母みやゑの姿を終生、忘れることはできない。「狂気にまで近い執念が通ったのかも知れない」と後に振り返ったが、実技面での高い得点は岩手での修業の成果でもあったのだろう。母は「まさか、受かるとは」と複雑なような困ったような表情をつくったが、底力、自分の人生を切り開いた次男を誇らしく眺めた。

実の大学合格と同じころ、分家である剛の実家でも、家族間で大きな騒動が勃発していた。

山添高で高校生活を送っていた長兄・勝が「富山の商船学校に行きたい」と言い出したのだ。父元雄は心臓病、神経痛を抱えて思うような仕事はできず、母かつるは長男が高校を卒業し

て、家の大黒柱として働くことに期待を寄せていた。

だが「世界を知りたい。七つの海をまたぎたい」の好奇心を勝は抑えることができず、自分で受験証を取り寄せ、北陸まで試験を受けに行き合格を果たした。

### 分家でも騒動勃発

驚いたのが母だ。「お父さんの体の具合が良くないのに、誰が家を継ぐの? 長男の務めがあるでしょう」と合格手続きに必要な印鑑証明を隠してしまった。収まらない兄の姿を見て助け

舟を出したのが3歳下の中学生になった次男・剛だった。「兄貴、船の学校に行けよ。オレが家で農業やるよ。家を継ぐよ」と言い出した。これを聞いた母はついにさめざめと泣きだしてしまった。「中学生になったばかりの弟が物事分るわけないでしょう……。どうして分かってくれないの」というわけだ。仲裁に入った長女の夫で秋田の営林局勤務の高山茂が「勝君の気持ちも分かるが、それだけ農家の長男というのは役割が大きいんだ。もう一度考

えたらどうか」と説得してきた。結局しぶしぶではあるが元のさやに収まるように長男が家を継ぐことになった。本当に継ぐ意思だった

剛は角界入門6年後の大関昇進(35年)時、兄に「オレは中学生だったけど、あの時、家を継いでいと本気で思っていたんだ。でも兄貴が家を継いでくれたおかげで大相撲に入ることになった。そして大関にまでなれた。ありがとう」と感謝の言葉を述べている。さて京都で美大生となつた実は実家からの仕送りなどは全く期待もできず、全て自分の力でやりくりしなければならなかった。最初はその下宿代にも事欠いた。そのため選んだ寢床が驚きの場所だった。

### 入門6年で大関昇進

○：柏戸の大関昇進パーティーは35年秋場所前の9月7日、東京・二重橋前の東京会館で行われた。柏戸は大銀杏姿で相撲協合理事長で一門の総帥でもある元横綱双葉山の時津風親方を出迎えた。写真。柏戸の左隣が師匠・伊勢ノ海親方。

|| 敬称略 ||  
(富樫 嘉美)

毎週火曜日付に掲載